

## 登山と想像力

大阪で開催された経済理論学会の書評分科会で、会員ではない私の編著書『現代資本主義とマルクス経済学』が取り上げられるというので、オブザーバーとして参加し、書評氏の意見を伺うとともに、若干の自説を述べる機会を得た。分科会では3冊の本が順次取り上げられ、参加者はそれほど多くなかったが、近年の我が国におけるマルクス経済学の状況の一端を見聞することができた。

学会からの帰路、新幹線の中で頭の切り替えをするために、京都駅の地下の書店で本を買うことにした。私のお目当ては内田樹（たつる）の『憲法の「空語」を充たすために』（かもがわ出版、2014年）であった。著者はフランス思想研究者にして、合気道7段の武道家で、近年日本国憲法をめぐる政治・社会状況について、独自の立場から積極的、時に過激な発言を続けており、自ら憲法擁護運動にも参加している。私自身は寡聞にしてこれまで著者のことを詳しく知らなかったが、上記の本は、我が家に送られてくる通信販売の宣伝誌に「目からウロコの一押し本」との触れ込みで推薦されていた。しかし、実際に中身を読むまでは、タイトルにある「空語」の「深い」意味は理解できなかった。

駅の書店はそれほど大きくなく、お目当ての本は程なく見つかり、他にもう一冊同じ著者の本を求めることにした。しかし、私の場合、疲れた頭の切り替えにもっとも効果があるのは社会関係ではなく、趣向を凝らしたミステリーでもなく、非日常の世界でありながらある意味きわめて即物的な登山関係の本を読むことなので、ついでに登山コーナーで手ごろな本を探すことにした。そして、いろいろな本に挟まれて窮屈そうに置かれている目立たない一冊の本を見つけた。それは、『だからこそ、自分にフェアでなければならない。プロ登山家竹内洋岳のルール』という何とも長々しいタイトルが付けられた本（幻冬舎2014年）であった。

私は登山家ではないが、日本人で唯一の8000メートル峰14座登頂者としての竹内洋岳（ひろたか）の名前は知っており、最後のダウラギリ（8167メートル）に登頂して帰国後、テレビのインタビューで、8000メートル峰の「デスゾーン」と呼ばれる超高所に向かう心境を、素潜りで100メートルの深みを目指す潜水競技になぞらえて話すのを興味深く聞いたことがある。ただし、この本は彼自身が自分の登山経験について著した本ではなく、登山好きで、以前にかれのインタビューを映したことのある写真家が、かれと一緒に電車で長野にむかい、茅野駅から八ヶ岳（天狗岳）に登り、山小屋と一緒に泊まって、かれの山でのふるまいと、道中での言説を書きとめる形でまとめた本で、当然幾葉かの写真が添えられている。

この本は、一言で言えば、なぜ竹内だけが数ある日本の登山家の中でただ一人、14座の登頂に成功したのか、という疑問の答えを探した経緯を記したものである。その答えは、竹内が特別に強靱な身体能力、超絶した登山技術、恐怖を克服する超人的勇気を備えているからではないであろう。14座登頂を目指して、志半ばで命を落とした登山家の中には、それらの点で竹内に劣らない猛者は何人もいる。著者である写真家の発想は、その答え一

——一つではないかも知れない——を、竹内の山でのふるまいや、自らの登山経験についてのさまざまな話を手掛かりにして、見つけ出せないかということである。

写真家は、竹内が八ヶ岳に向かうのに、小さなリュック一つで水筒も持参せず、食べ物もほとんど携帯せず、登山中もリュックからほとんど物を出し入れしないことに驚くが、そんなことはもとより秘密を解くカギにはならない。また、登路で、幾度となく遅れがちな写真家をじっと立ったまま待っているすがたを描いているが、これも当然である。私の娘婿は、一時期世界最強と謳われた山野井泰史夫妻と山岳会で知り合いになり、何回か国内の短い山行に同行させてもらったことがあるが、やはり、終日殆ど飲まず、食わず、休憩せずに歩き続ける山野井についてゆくことができなかつたと話すのを聞いたことがある。彼らは、当たり前であるが、常人から見れば、一種の超人なのであろう。

そんなことよりも、写真家がもっと注目するのは、竹内がなぜか黒曜石——蓼科の近くに黒曜石の有名な産地がある——に詳しいこと、岩や木の幹に模様を描く地衣類に興味をもって幾度となく写真に収めること、雨の中をレインウェアではなく、傘をさして歩くこと、雨でぬかるむ山道を何時間も歩き続けて、靴をほとんど汚さないこと、足音を殺しながらまっすぐきれいに歩くこと、などである。こうした一連の観察から、写真家は竹内の自然への繊細な神経、美しい山歩きにこだわる職人的資質を感じ取っている。

一泊二日の山歩きで、かねてからの疑問を解くために、写真家はさまざまな質問を投げかけ、一方竹内はそれに対して、驚くほど直截な言葉で、答えを返している。

最初の重要な質問は、登山の成否を運の良し悪しで語ることができるかという問題である。竹内によれば、登山の成否を決定するのは運ではなく、想像力だと言う。巨大な山に向かって、自分がこれから登ってゆく道筋や時間配分、その途中で出会う雪崩を始めとするさまざまな危険や困難、それらを乗り越えるために必要な方策や道具の細部、さらに登頂後の下山で経験する危険やそれを回避するための方途、日没の時間切れで余儀なくされる高所でのビバークの場所、失敗した時の死にざまにいたるまで、そうした事柄のディテールを他の誰よりも先に、正確に想像できた人が登頂でき、それが出来ない人は後塵を拝するか、悪くすれば命を落とす。まさに、神は細部に宿る、である。

「私たちは想像するために山に行っている」

「登山っていうのは想像のスポーツです」

「山は想像できるかどうかにかかっています。如何に細かく多方向に多重に想像できるかどうかを、私たちは競っている。それが面白いわけです」それを運だと言うと、想像という要素が弱くなり、登山は成り立たない、「私にとって、山では運で片づけるべきものは一つもない」とかれは断言する。そして、彼はこう付け加える。

人間にとって死の領域である 8000 メートル峰に酸素の助けなしに登るためには、ベースキャンプから段階を追って次第に高所にキャンプを設定し、高山病のさまざまな症状に苦しみながら、何日もかけて体を薄い空気に順応させ、8000 メートルを超える場所でなお自分の体を急斜面で押し上げ続け、意識も失わず、遭遇する危険を回避する判断力を維持し、

頂上に到達して記録を残し、さらに、登ってきた道を無事に下山しなければならない。これは、もともと海中に棲んでいた生物が、ある時何かの理由で陸地に上がり、最初はずぐに海に逃げ帰ることを繰り返しながら次第に陸地に順応し、何億年もかけて遂には陸上で棲み続けられるようになった進化の過程になぞらえることができる。山は自分にとって、死の危険がある場所と言うよりも、自分が如何に進化できるのかを試す場所であり、人間の潜在能力を目覚めさせ、引き出しているわけです。それが登山の面白さです。そして、竹内はこう付け加える。

「登山は職人の世界みたいで、職人になるべき人が、その環境に適応して登山を続けるのだと思う。登山への適性について言えば、山の話をするときの目つき、普段ふつうに歩いている時の姿、ロープを渡した時にどう受け取るか、その振る舞いで分かります。ただし、人の性格、高所への順応性などは、見ただけではわかりません。また、適正とその人が残す登山記録とは別のものです」

次の質問は、登山における経験についてである。優れた登山家は、厳しい登山経験を積み重ね、技量・体力・判断力を磨き、普通の人が到達できない高みに至ると考えられている。そして、時に、20年も経験を積んだベテラン登山家が思わぬところで遭難した、などと言われる。しかし、竹内によれば、登山に経験は役立たないと言う。彼が1995年（マカールー登頂）から、2012年（ダウラギリ登頂）まで17年かけて世界で29人目のフォーティーン・サミッターになるまでに登った14座は、すべて異なっており、別の山である。マカールーやエベレストの経験を、ナンガパルバットに持ってきて、参考にすることなどできない相談である。つまり、山での経験は、次々と積み重ねて、そのまま次の登山に生かせる性質のものではなく、新しい山に向かう度に、改めて自分の想像力の限りを尽くして、登山経路、必要な技量や装備、遭遇する危険や困難、いざという時の対処の仕方を「多方向に、多重に」想像することから始めなければならない。過去の経験は、想像にリアリティを持たせるために役立つかもしれないが、想像力にとって代わることはできない。経験が想像力にとって代わるのは、非常に危険なことなのである。その意味で、経験は積み重ねるものではなく、横に並べておくものである。

もう一つ興味深かったのは、13座目のチュー・オユー（8201メートル）の頂上近くまで達しながら、雪崩の危険を感じて撤退した経験についての竹内の述懐であった。

「勇気ある撤退などというものは存在しない。登り続けると言う判断と、即座に撤退すると言う判断は同じもので、良い悪いはありません。登れる状況の中では、前者の判断をし、撤退しなければならない状況の中では、後者を選ぶ、ただそれだけのことです。それは、人々が日常生活——ここにだって無数の死の危険が潜んでいる——の中で普通に、殆ど自覚なしに行っていることです。死の領域に踏み込みながら、持てる能力を全活用して死を回避することが登山の面白さです。ただし、日常生活では危険は「鞘に収まって」いて見えにくいけれど、山では、死の危険が抜き身のようにはっきりと見えるところが違います。

「撤退を決めた時、私は想像できました。ここで自分が雪崩に巻き込まれてどうやって死んでいくかっていうことを。想像できれば、やっぱり怖いとか、これは駄目だとかって思うんです。その想像力と、なんかやばいっていう恐怖心を利用して、危険性を回避していくしかないと思います」

そして、竹内はこの時の経験について、さらに、次のように述懐している。

「雪崩の原因になる雪の弱層をテストして、斜面の角度や雪の湿度を測って、雪崩の確率が何パーセントと判断したわけではありません。そこに立って、ハッと気がついたんです。この殆ど本能的な山での予感能力が、14座を無事完登できた理由の一つかもしれないが、その時、雪の破断面を目にして撤退の決断を下すまでに10歩の時間——8000メートル近い高所での10歩——がかかりました。せめて、一、二歩で気付くべきでしたが、ここまで来れば頂上に登りたいという潜在的な気持ちが、判断の遅れを招いたのかもしれない。しかし、この10歩の遅れは今でも悔しいです」

竹内は、2007年に挑戦した10座目のガッシャブルムⅡ峰（8034メートル）で巨大な雪崩に巻き込まれ、同行者二人を失い、自身も脊椎損傷の瀕死の重傷を負った。これほどの経験をすると、ある登山者はそれを運で説明し、別の登山者は、忘れることで自分を保とうとする。しかし、竹内は、いまでも「結局、あれは何だったのだろうか」と考え続けることで自分を保っているのだと言う。かれは、山をやっている人間が自分の運を云々するのは無責任であると断じ、他方で、自らを進化させ、想像力と予感能力を高めるために、忘れることを拒否し、時に悪夢にうなされながら、そのことを考え続けているのだと言う。おそらく竹内にとっては、この経験を考え続けることと、新しい山に登り続けることが、二重螺旋のように離れがたく絡み合っているのであろう。

これまで、他の登山家からこんな言葉を聞いたことはなかったが、竹内は、山は多くの人が登るほど魅力が増すのだと言う。誰も山に興味を示さず、登る人間がいなければ、山は地球上のただの出っ張りにすぎないと言う。例えば、エベレストは、マロリーが何度も挑戦して、最後には遭難し、その後何十年もたってヒラリーやテンジンによって苦闘の末に初登頂がなされたことで、特別な山になりました。

ところで、世界の最も高い山14座を完登すると宣言し、約束通りそれらを登りつくして見せた現在、竹内にとってどのような登山がこの後残されているのだろうか。これが、写真家の最後の質問である。竹内によれば、山は高さではない。8000メートル峰に登りつくされても、地球上には登山家や探検家を引き付ける未踏のエリアがいっぱい残されている。ただし、あえて未踏峰を選んで登るつもりはない。未踏峰であろうとなかろうと、標高がどれほどであろうと、自分が登りたい山を選んで登る。美しい山を見つけ、一体どこからどう登ったらいいのだろうと考え、想像し、美しいラインを発見してそのルートに登る。そうすれば、いままで誰も見向きもしなかった山が世の中の知るところとなる。その山が魅力的な山であれば、登る人がどんどん増えて、その山の魅力がさらに高まってゆく。そういう登山の可能性はまだ残されている、とかれは述べている。

京都駅の本屋で、釣りの外道のように偶然見つけた本の話をごここまで長々と書いてしまった。私は登山家ではないので、竹内のすべての発言の真意を自信をもって受け止めたと言いつけることはできない。しかし、経済学の一研究者として、本書に記された竹内の言説から、多くの感銘を受け、同時に共感を禁じ得なかつたことは間違いない。

ところで、それはまあいいとして、最初のお目当てだった内田樹の本の感想はどうだったのかつて？そちらのことはすっかり忘れていたが、それについて書き始めると、また長くなりそうなので、今日のところはとりあえず、論旨は痛快で面白いし、頭の体操にもなるし、読んでけつして損はしない、とだけ書いておくことにする。ただしこれは、あなたにとってこの本が同様に痛快で有益だということを保証するものではありません。